

編集 ラディカルシック編集委員会
発行 ウィンドベルファクトリー
連絡先 新宿区西新宿7-3-10
山京ビル503-201

radical chic

辺野古新基地建設工事の中断へと 遂に追い込まれた帝国主義者ども の「反テロ」戦争策動を伊勢志摩サ ミットで迎え撃ち、いまこそ安倍 政権に致命となる痛打の一撃を！

安倍自公政権は3月29日、遂に安全保障関連法の施行を強行した。戦力の不保持を謳った現憲法下において自衛隊は軍隊ではないと強弁せざるを得なかった歴代自民党政府の立場をはるかに超出し、安倍は集団的自衛権の行使をも可能にするこの安保法制をもって「もはや現実には合わない憲法」を強引に改憲していくという自作自演政策を衆参同日選挙によって一気に実現させようという意図をばは隠さない。アベノミクスのあからさまな失敗を隠蔽するかのよう消費増税の再延期までちらつかせ得票の上積みを取ろうとするこの末期的ミュンヒハウゼン政権をこれ以上に野放しにさせてはならない。

「反テロ」戦争体制を準備する
サミットに共に反対しよう！

世界経済の低迷と相次ぐ国際
「テロ」の頻発を背景に来月5
月26日、27日伊勢志摩G7
首脳会議を中心にサミット（先
進国首脳会議）が行なわれる。

議長国である安倍政権にとって
日米防衛協力のための指針（ガ
イドライン）改定から安保法制
法制の強行によって米軍リバラ

ンス政策を補完し、文字通り米
軍と一体化し世界のあらゆる日
米ブルジョワジーの権益確保を
目的として軍事力を行使する新
たな日米同盟を誇示する格好の
舞台となる。

今日凋落する米帝が戦後冷戦
構造下で隠然と行なってきた陰
惨を極める暴力的植民地支配、
収奪・強盗・虐殺のための諸暴
力装置への純化を「テロ」を口
実に再編しようとするのが米軍

再編の本質であり、一見対米独
立志向を隠さない日帝安倍政権
の安保法制から改憲へと至る目
論見は、米帝の軍事的支配体制
へ積極的に肩を差し出しその分
け前に与ろうとするものでしか
ない。

自衛隊特殊作戦群の育成、水
陸機動団の創設、オスプレイの
配備計画等は、「反テロ」「防災」
を口実にした日米帝国主義者の
グローバルな階級支配・収奪体

制を確立するに欠かせない軍備
計画の一端であり、辺野古新基
地を初め沖縄全島にこうした軍
事拠点としての機能を担わせよ
うというのが日米ブルジョワ
ジーの執拗な方針なのだ。

「反テロ」戦争による階級支
配の貫徹を急ぐ敵ブルジョワ
ジーの走狗たる帝国主義者の頭
目どもの（集団的帝国主義化）
への自己再編に抗して、サミッ
トに反対し、共に闘わん！

2016年〈4・28〉シンポジウム

〈反テロ戦争〉に向かう時代に考える—

世界の中の沖縄／辺野古

日時 4月24日（日）13時～17時まで

場所 全水道会館4階大会議室

発言者 田仲康博・板垣雄三・丸川哲史

主催 (4・28)シンポジウム実行委員会（呼びかけ 沖縄文化講座）
九条改憲阻止の会

米国大統領選から見えてくるもの

若者たちの潜勢力

幾瀬仁弘

報道されているように、現在米国では大統領選挙に向けて民主党、共和党の指名候補を選ぶ予備選挙が行われている。ここで興味深い現象が起こっている。それは、これもまた報道されているように、「民主社会主義者」を自称するバーニー・サンダース民主党上院議員の躍進である。

あり、そのうち消えてなくなるだろう。この共和党の体たらくぶりを見ると、米国社会はもはや共和党的政治では対応できない状況になっているということなのか、もしれないが、では、民主党は、ということを目を移してみると、社会主義者がたいへんな勢いを示しているという前代未聞の状況である。

あの米国において(！)、自称「社会主義者」が大統領選の候補者となり、しかも人気を博し、次期大統領の本命とされているヒラリー・クリントンを苦しめているとは、これまでの常識では考えることができない現象がいま起こっているのだ。一方の共和党は、ともに超保守派であるトランプとクルーズが優勢のようだが、共和党主流派から見ても、もはやお話しにならない低水準の議論で

サンダースが打ち出している政策は、最低賃金の引き上げや富裕層に富が集中する格差の是正、そして公立大学の授業料無償化などのである。現代の米国の若者たちの多くは、「奨学金」という名の借金の返済で苦しい生活を強いられている。聞く話によると、一人の若者の負っている返済額はかなりのもののように、まさに借金地獄の生活を送らざるを得な

い状況の中、貧困に喘いでいる。サンダースは現在の奨学金問題に關しても積極的に発言し、給付型の奨学金制度をつくり、現在返済に苦しむ若者たちに対してもそれを適用していくことなどを公約に掲げている。このような政策を打ち出すサンダースには、これまでの行なわれた民主党の予備選では、一九歳以下の民主党支持者の実に八五%が票を投じているようである。

若者たちの熱烈な支持を受けながら躍進するサンダースだが、しかし常識的に考えれば、このまま勝ち続けるといことはやはり難しく、予想通りクリントンが民主党の候補者になる可能性は高いだろうが、しかしこれだけの支持を集めたということで、彼の示した政策がクリントンの政策に何らかの形で盛り込まれていくことだろう。

しかし興味深いのは、世界の資本主義を支配する国で社会主義

よってものではやされている。「ようやく若者が運動の現場に出てきた」「未来も捨てたもんじゃな」といったように。だからと言ってそれだけで満足しては

者が大統領選の候補者として名を連ね、熱烈な支持を受けているということはもちろんのことだが、注目すべきは若者や学生たちが社会主義者を大統領選の候補者として押し上げたということである。それは、つまり現代の米国の若者たちが共通の利害を持ち、同じ政治的主張と世界観を共有する一つ塊、「層」として存在しているということである。当然と言えば、当然かもしれない。

現代の米国社会で犠牲になり、搾取・抑圧されているのは、若者たちであるからである。そういった意味で、米国社会の若者たちは、いわば「階級」を形成していると言ってよいのかもしれない。

今回の米国大統領予備選でサンダースが勝つか、負けるか、負けるにしてもどれだけの支持を集めるかということはいずれの米国の政治を左右することになるがゆえに重要であることは言うまでもないが、それと同時に見

落としてならないのは、米国社会を根本から変革しかねない潜勢力を米国の若者たちは有しているということ、これが蠢き、顕在化しつつあるということである。これがはつきりと現われたとき、もちろん日本にもかなりのインパクトを与えることになるだろう。

米国よりもやや遅れて新自由主義的政策を進めてきた日本においても、学生の奨学金問題や若年層の貧困問題は深刻の度を深めつつある。残念ながら現在のところこうした問題の克服が若者全体に共有されたものにはなっていないが、近い将来、日本社会全体を揺り動かすことになる可能性はある。

それゆえ、こうした若者たちの潜勢力に因應するために、いまや大胆に社会主義、共産主義を標榜することがむしろ必要になっていくのではないか、そんな思いを抱かされる。

負けであったと思っている。前回(学生運動の位置づけを考える①) 鉄柵の中で声を挙げるに留まらず鉄柵を越えてからの運動の始まりであると述べた。

学生運動の位置づけを考える(2)

神田月

ここ最近の社会運動において、学生の登場が大人たちに

つまり非暴力直接行動である。そこで今回は今後の運動を、とりわけ学生運動を展開するにあたってどうすべきかを考えていきたい。

2015年の夏、国会前は多くの民衆で埋め尽くされた。人の洪水とも形容できるその光景は従来と少し違って、それまで以上に学生や学者の参加者が目立ち、メディアもそれを取り上げた。だが、確かに人数は増えたかもしれないが、結果として安保法制は成立される事となった。私の友人の学生も「いても立ってもいられず初めて国会前デモに行ってきた」と言っていた。また、学者の会があちこちの大学で結成された。このよう

「最低でも県外」。鳩山氏のこの発言から、沖縄の人々は期待感を抱き、希望を見出したのかもしれない。

鳩山氏には日本に対するビジョンがあったようだ。アメリカのオバマ大統領の「CHANGE」

に全国各地の大学の勢いは凄まじかったと言えるだろう。

しかし、よくよく考えてみるとそれはひどく違和感があるように思える。同じ大学の講師と学生が、学内でなく国会前に集まる事はごくごく自然な事なのだろうか。似たような考えを持つ学部も学年も同じ学生が国会前で初めて出会う事は普通なのだろうか。それは自然かもしれないし、あるいは不自然かもしれない。私の場合はそれをとっても不自然なことだと感じた。そして組織化されない運動は瞬間の盛り上がりは見せるが、中長期的に弱いものだと感じた。かつて労働組合の力が今よりずっと強かった時は巨大な組織

「属」

杉村公平

として確立され、実際に多くの権利を獲得し、それによって労働者は保護された。今は労働組合も衰退し世界的にも新自由主義化が進み、極悪企業は労働力を使い捨てにし、やりたい放題となっている。また、大学においては学費がぐんと跳ね上がり、年々高額化している。それだけでなく、その大学の学生以外は立ち入り禁止にするなど、排外主義化が急進している。あるいは政治活動を制限し、学問の自由が大学当局側によって奪われている。だが、それを許してしまっているのもやはり学生や労働者が組織化されず、歯止めがかかっていないからではないだろうか。

ではないが、国民が変化を望む気持ちにうまくアピールし、自らの政治思想について発表した論文のなかに鳩山氏は人が「目的ではなく手段として」扱われる「市場原理主義や金融資本主義」を批判して「アメリカ一極

支配の時代から多極化の時代に向かうだろう」と。そして、東アジア共同体はそのひとつの現れである、と述べて自らの政治を「友愛」と定義した。この「友愛」とは、「軟弱どころか革命の旗印ともなった戦略的概念なのである」。(鳩山由紀夫『私の政治哲学』)

今必要なのは傲慢な権力の歯止めをきかせるための運動であり、それを成し得るための組織化である。学生ならば学内で、労働者ならば職場である。身近な場所での運動で勝ち続けなければならぬ。それも長期的にこそ、話は戻るが、以上の理由から国会前で学生と学者が集まる事は結構なことではない。それだけ、学内から追いやられている証拠なのだ。そのことに危機感を覚えざるを得ない。国会前に集まる以前にクリアせねばならない問題として、私はまず学内展開をする事だと言いたい。学内の、社会に対して危機感を覚える者がバラバラになっ

ている現状を打破し、学内において総結集し、大学当局の囲い込みから学生の自由を獲得する事が必要だ。そうしなければ社会に明るい未来はない。このままではますます自由が制限され、魅力を失う一方だ。だからこそ、本来は組織化した上で、連合的に学生運動を展開し、国会前に集まるべきなのだ。従って私は善い社会を実現するために今後の運動の展開として、学生の組織化を訴えていきたい。そして、その輪が東アジアに広がり、さらに世界的に広がるのがフェアで平和な社会へ繋がっていくと確信している。

議席を獲得し自民党に圧勝した民主党は、政権を勝ち取り、鳩山氏が首相として鳩山政権が誕生する。「最低でも県外」を公約に。当初は70%を超える支持率だったが、「迷走」ぶりに支持率は徐々に低下し、結局、鳩山政権は9ヶ月弱で退陣に追い込まれた。「鳩山おろし」の裏でなにがあったのか。つい先日、日本プレスセンターで開か

れた鳩山由紀夫氏の講演会で、氏は真相を話した。

民主党政権時の2010年4

月、防衛省と外務省の閣僚たちが鳩山氏を訪ねて官邸に来た。

目的は米軍基地の沖縄県外への移設についてレクチャーするた

めだったと言う。訪ねてきた官

僚のひとり、鳩山氏に「普天

間移設問題に関する米側からの説明」というタイトルで右上に

「極秘」と版が押された3枚の文書を差し出したそうだ。「ア

メリカ大使館と交渉した結果」

と言つて。

その「極秘」文章には米軍の

マニユアルとして

・航空部隊と陸上部隊の訓練の一体性を考えると、移設先は

普天間基地から60マイル以内に限る

つまり、沖縄本島は70マイルであるため、沖縄本島以外では

駄目だということである。退陣前の鳩山氏は移設先として幾つ

か候補を挙げていた。鹿児島、徳之島や馬毛島がそれである。

そのほか、佐賀の有明佐賀空港

や東京の横田基地、大阪の関西

国際空港など。移設先に関し、

次第に鳩山氏の「迷走」振りが

露になり、結局アメリカに従い、

沖縄県民を裏切ることになった

が、裏では、「アメリカがそう

いう条件（移設先を60マイル以内に限る）であれば、沖縄以

外に持つていくことは不可能だ」のとの官僚による巧みなト

リックに嵌められていた。鳩山氏は断念せざるを得なかった。

決定打となったその「極秘文書」だが、琉球新報の調査によると、

公文書であるはずだがどこにも存在しなかった。

「極秘」の期限は2015年

4月18日で解除されたため、鳩山氏らは管理する外務省に問

い合わせをしたところ、文書を扱う大臣官房総務課の担当者

は「3枚の文書は」公文書ではなく、そして外務省が作成したも

のかどうかも分からない」と言つたという。官僚による、畏

だったのだ。鳩山氏は講演の終わりに言つた。「アメリカではなく日本の

官僚の知恵でこういうもの（3枚の文書）が出てきた。信じ

た私が悪かったが、相当に巧妙

だった」。「最低でも県外移設」。鳩山氏の発言と政治は、沖縄の人々に

希望の光を差し込んだのは確かであると思うが、結局は、対米

従属とネオリベラリズムに回帰してしまった。その落差あまり

にも激しい。深い対米従属関係と強固な官僚支配構造が、その

差にあらわられていた。

〈寄稿〉LGBT(セクシユアルマイノリティ)「運動」を

支持、協力する「左派」をゲイ当事者が糾弾する

難波 大助

LGBTとはレズビアン、ゲイ、バイセクシユアル、トランスジェンダーの頭文字を並べたものでセクシユアルマイノリティの総称である。レインボーのフラッグを掲げ、彼らに対する盲目的な支持を表明する左派が年々増えている。しかし私は左派(少なくとも自身をそう規定する者)がLGBT運動に関わることに對して怒りを禁じえない。何故か。LGBTは資本

LGBTとはレズビアン、ゲイ、主義に非常に親和的であり、市場原理主義と相互補完的な関係にあるからである。そもそも何故近年殊更「LGBT」の権利が叫ばれる様になったのだろうか。それは資本が巨大な「LGBT」市場の存在に注目し、積極的にそれを利用する様舵をきったからである。LGBT 商売はカネになるのである。この様な背景があるにもかかわらず「LGBT 運動」に加担することは、新自由主義的の制度

や価値観を強力に推し広めることと同義である。しかしそういう外面的な問題とは別に「LGBT 当事者の中にはその様な新自由主義的価値観に反対する者はい

るだろうし、そもそも「LGBT」への差別偏見は実際に存在するのだから、それに反対する運動に参加する必要はあるのではない

か、という批判が返ってくるかもしれない。その様な批判に対して、私は前者に対しては勿論否定しない。私自身がゲイでありアナキストであるのだから。しかし左派的思想を有するゲイは現代の日本においては極

にやならんの」という許し難い戯言を平気で呟いている。そこには「got」よりもずっとしんどい暮らしを余儀なくされている野宿者への配慮は全くない。また

た、ゲイを売りにして豊島区議になった社民党の石川大我は区内でも特に高い豊島区議の議員報酬の更なる値上げに自民公明と共に賛成した。また

代々木と信濃町が戦争法案に対する議論の応酬をしている時に堂々と居眠り。渋谷区が同性パートナーシップ条例を施行したことを賛美しても、野宿者へ

の殺人行政への批判は皆無。「got」運動」支援者も当事者も無知か確信犯かの違いはあれ、どうでもよいことをさも重要な問題であるかのように主張し、

本当にどうにかしなければならぬ問題に取り組んでいる者たちの思いと活動を蹂躪し陵辱し続けている。

読者投稿 「ラジカルシツクを読み

沖繩とヤマトで思うこと」

若い人々が、沖繩現地の闘いに参加し、そこからの文章がとても鋭く、力強くうれしい気分にもさせてもらっています。読者の一人として、沖繩への想いを少し書いてみたくなりました。

いりました。その大きな輪に對する気持ち或いはこれから新しい歴史の1ページを切り開いてもらいたいという県民の気持ちがこのような形であらわれたことにこの枠組みをやってきて本当に良かった

人々の必死さが良く分かりました。選対事務所には、法定ピラのほかに思い思いにそれぞれ自発的に作られた手作りピラが、ジュゴンの折り紙をつけてピラを配ろうというアイデアが、それぞれの人各自分流にやりた

リアルに国家と対峙できるためには、そうした状況が必要なのでしょう。そんな経験はここ東京ではありえない状況です。いかにすれば、沖繩のような状況が作りえるのか？ 昨年の国会前を埋め尽くす経験をした私たちが次の段階へと行くにはどうしたらよいか？

治さんが「運動は緩やかに、真ん中の核がそんなにカッチンコッチンでなくてもいい。中がゆしどうふでもいい。周りもゆしどうふでもいい。とにかく広くそしてそれで強くなればいい。」というようにそんな風に私たちもいろんな考えも包み込みつつ、安倍政権のつく嘘に騙されない、それを暴く力をつけて自分の生活する場で、行動を起こしたいと思っています。

2014年11月15日、那覇市の県庁前は人、人、人で埋め尽くされていました。県知事選最終日の翁長さんの演説を聞こうと集まったのです。その場の空気を共有できた経験は私にとつて得難いものとなりました。そして、感動的な挨拶でした。

なと心から思っております。そして、もう一つ思いますのは、私たちの政治の力よりも県民の力のほうがこの枠組みの先を行っていて、沖繩のあらべき姿を県民の皆さん方が私たち政治家に示して頂いた

辺野古、高江の長い現地での戦いが、オール沖繩の枠組みを作り翁長知事を先頭に各自自治体の首長がそろい、行政の力がまた、現地の座り込みを支えるその相互作用が、素晴らしいと思

「平和」や「民主主義」が、今壊されるといふ、あまりに無邪気、無批判なコールに変えるコールを考えなければ、そういう議論を巻き起こさなければと痛感しました。ただ、若い女性の中には、「平和国家」の擬制、犠牲の上で成立した見せかけの「平和」だったと、自分の言葉で表現する発言があり、とても頼もしく感じました。

自己決定というのは遠い未来に輝く何かではない。それは日常の実践において可能となる新しい生き方というべきだろう。・・・辺野古・高江の運動は、私たち自身の主体化となる。この主体化の動きのなかでこそ主権の論理とは異なる「私たち」という新しい共同性がつくりだされていくはず。(新城郁夫)

私は、オール沖繩、イデオロギーよりはアイデンティティそして保革を乗り越えてこの難局を切り開いていこうと、こういうような気持ちでみんなと一緒してやってま

たんだなということ強く感じています。選挙運動の一端に参加させてもらい、街を歩き旗振り手ぶりの行動を経験して、街が熱く

活動を支え新たな動きを産み出し、当選した政治の力でまた現地を支える構造が見えました。

さて、安倍自民党、公明党を選挙で落とすことは、やはり重要なことです。直接行動とともに、その運動の中で訴える質を追求したいと思えます。山城博

一読者より

寄稿 「憲法・戦争法制・安倍打倒」その三

古在 潔

憲法に「瑕疵」あり(続き)

前回「憲法」に瑕疵あり

で二点指摘した。さらにもう一点付け加えなければならぬ。沖繩である。

1947年5月3日に施行

された新憲法は、ハーグ陸戦条約にも違反した米軍の沖繩占領統治に一顧だにすることにはなかつた。過酷な米軍政支配と膨大な軍事基地(そこには核も毒ガスもおかれていた)に苦吟する沖繩には適用されなかつた。沖繩には「平和」も「民主主義」も「人権」もなかつたのである。否、沖繩を見捨てて憲法は制定された、講和Ⅱ日本占領の終了(1952年4月28日発効)が、

沖繩をアメリカに売り渡して日本だけの「独立」を謳歌したように。さらに72年沖繩再併合(「復帰」)以降も沖繩は「憲法番外地」とさえ呼ばれた。

「国体」は存続した

「戦争放棄」は「天皇(制)温存」の取引材料であり、そして「天皇(制)温存」とは

アメリカの占領政策をスムーズに推し進める道具でもあった。「憲法」第一条から八条に至る「天皇条項」なるものが「第一章 天皇」として麗々しく書き込まれた。ヒロヒトは、マッカーサーに「国体護持」をひたすら乞い願ひ、そうして存続が果たされた新たな天皇制のもとで、生き延びた。

「憲法三原則」と言われる主権在民、基本的人権の尊重、平和主義による(戦後)民主主義」はその誕生から蔑ろにされ、立憲主義も含め、すでに欺瞞に充ちたものとなっていた。そもそもヒロヒトが何故「天皇」であるのか。「神話」と言えば聞こえがいいが、

彼が天皇であることの根拠は、彼が「天皇の子ども」ひいては「神の子孫」であるということとしかない。憲法は「総意に基づく」という虚構で天皇を語っているが、それならば、天皇制それ自体を「国民投票」に付さなければならかつた。

薄汚れた解釈が、始まった

「日本は主権国家であるが、自衛権は放棄する」という「日本国家の反省」は、たちどころに投げ捨てられた。1950年8月、自衛隊の前身たる「警察予備隊」の創設である。米ソ冷戦体制の浮上、49年中国革命の勝利、そして50年の朝鮮戦争の勃発である。

敗戦・日本は、武器弾薬製造・兵員燃料輸送などでポロ儲け。血塗られた「朝鮮特需」は日本資本主義の復興を支えたのだ。そしてこの時も首相吉田は「警察予備隊創設の目的は、国内の治安維持のためである。軍隊にあらざ」と答弁していた。

しかし、なし崩し的(これも常套手段!)に、52年には「保安隊」に、さらに54年には「再軍備反対」の声を蹴散らし、自衛隊に再編強化された。そして、とうとう2007年には、防衛庁を「防衛省」に昇格させるに至った。

新たな「国体」―日米同盟

1952年4月28日に発効したサンフランシスコ講和条約については、沖繩売り渡しの「第三条」(無期限・無制限の沖繩支配を米帝に委ねる)がつとに有名だが、その「第五条」の「C項」には国連憲章を引き合いに出して「個別的又は集団的自衛の固有の権利を有すること」が

しっかりと書き込まれている。さらに、同条項の後段では「日本国が集団的安全保障取極(とりきめ)を自発的に締結することができることを承認する」が書き加えられ、それをもって日本の「要請」としての「安保条約」(それに付随する「行政協定Ⅱ地位

協定)が同時に締結された。「われわれが望むだけの軍隊を望む場所に望む期間だけ駐留させる権利を確保する」というダレス発言は、まさにこの日米交渉の時に発せられた。

戦後日本の矛盾

憲法に書き込まれた天皇制という超憲法的現実のもう一つの柱が日米安保条約である。この日米同盟を指して「戦後国体」とも言われている。まさに安保と天皇は、日本の国家と社会を根底的に歪めてきた元凶であり、「日本国民」は、この欺瞞の中に生きることを強いられた。

「憲法」が指し示す理念とそれと対立する安保と天皇という現実との矛盾が、日本国家の戦後をグロテスクに示している。「逆コース」などと呼ばれる憲法の理念の形骸化以前に、こうした法の理念と政治の現実との乖離が、存在していたことを忘れてはならない。